

“徽州歴史地理学” 初探

周 懐宇

(解説、抄訳 遠藤隆俊)

解説

周懐宇先生は1947年中国安徽省の生まれ、安徽大学歴史系の教授で、古代史研究室主任、同大学徽学研究センターの研究員を兼ねている。専門は隋唐五代の経済史や歴史地理、文献学であり、編著に『中国考試制度史』や『淮河流域経済開発史』などがある。ここに収録した論文は2004年10月に高知大学で講演した内容を活字にしたもので、先生の研究の一端を示すものである。高知大学と安徽大学とは協定関係を結んでおり、今回の来日も高知大学の招聘による両校交流の一環である。以下、その時の発表原稿もつきあわせながら、本論文を簡単に抄訳する。なお、本稿の掲載にあたっては、平成16年度高知大学教育学部長裁量経費の交付をいただいた。記して謝意を表す。

抄訳

「徽州歴史地理学」初探

徽学研究は不断に深化している。歴史地理学の角度から徽州の歴史地理を総括すれば、この分野は徽学研究に対して直接の助けとなるばかりか、徽学研究の領域を拡大する。徽州の特殊な地理環境と徽州周辺の地理環境の変遷は、徽州の社会、歴史と文化に大きな影響を与えた。とくに宋代から明清時期に徽州商人が勃興したことは、徽州の地理環境および周辺の地理環境の変化に大いに関係がある。本論文では徽州の歴史地理およびその周辺における歴史地理の変遷について検討することにより、先人が徽州の地理について考察した成果に対して、さらに徽州歴史地理学研究のいくつかの新知見を提示したい。

一. 中国東南海岸の変遷およびその徽州に対する影響

徽州は大海に面していないが、中国東南沿海地域に連なっている。沿海地域の地理環境の変遷と海岸線の拡張は内陸河川の河口の変遷や沿海港口の発生、沿海都市の発展をもたらし、直接的に徽州の手工業と商業の盛衰に影響を与え、徽州社会の歴史的発展を刺激した。この2000年の間、徽州およびその周辺地域は非常に大きく変化した。

今日の江蘇省北部の沿海平地帯の場合、その海岸は中世期においてかなり変化が見られる。歴史の記載および現存する堆積物の物理的な分析によれば、先秦時期、江蘇北部の平原南端の古沙咀は揚州から東に延びており、その海岸線は今の泰州より如皋、海安以東の李堡地域にあった。李堡以北の海岸線は、今の東台、塩城、阜寧、漣水県以東の雲梯関、錦屏山東麓、連雲港市一帯にあった。今の如東県（掘港）は、当時はまだ長江河口の北に位置する孤島であった。

近年来、地理学者が江蘇北部の観察をしたところ、やはりこの一帯の海岸が東に延びていたことが証明された。歴史上、長江下口の揚州付近は、涌潮を形成していた。これを「広陵涛」という。秦王朝の時に、ここに広陵県を置いたことにより名付けられた。広陵県は漢代にも続き、「広陵観涛（広陵県で涌潮を見ること）」が漢代以来の行事となった。

隋唐時期、今の揚州市は海から近かったばかりか、長江河口の南北各地も、今に比べ

ば海に近かった。長江南岸の沙嘴は4世紀より東に進み始めた。両晋時期、海岸は既に太倉の東北20kmに達していた。近年、地質学者が古い岡身の外側約20kmのところ、唐代の遺跡を発見した。10世紀以前の唐代では、今の上海市区域は既に陸であったと彼は説明している。宋代の海岸はさらに東に延びている。北宋時代、海岸線は岡身の東側から盛り上がって30km以上に達していた。

二. 唐宋長江下流内陸の変遷

唐代後期、長江には多くの沙洲が発生した。その最も大きなものが瓜州である。これら沙洲の開発も、また地理交通に影響を及ぼした。徽州の祁門水（今の閩江）は直に鄱陽湖に流れ込む。徽州では「祁門水は鄱陽湖に流れ、民は茶や漆、紙、木を江西にもって行き、米をもらう」と言う。鄱陽湖は徽州の西から江西に出た水で、長江中流域の経済や文化交流の要道となっている。鄱陽湖の変遷は直接に徽州の命運に影響を与えている。清朝後期、鄱陽湖の水域面積は中国淡水湖の中で第一位になった。交通運輸の発達は商業貿易に多くの有利な条件を提供した。

三. 上海市の発展と興隆

唐の玄宗天宝10年（751年）、上海地域に華亭県が置かれた。唐代の青龍鎮は江南沿海で最も早く開けた海上交通と貿易港の一つであった。宋代には海船がたくさん往来し、上海に鎮が開設され、元代には県が置かれた。明清時期、上海は既に次第に隆盛であった。徽州商人もこの時期に進出し、新興都市に足を留め、上海は徽州商人の集散地となった。

四. 黄河の淮河流入と江蘇北部海岸の変遷

宋末元初、黄河が淮河に流れ込み、黄河と淮河、長江下流の水系に変化が生じた。金朝章宗の明昌5年（1194年）に黄河は陽武口から決壊し、淮河に流れて海に入った。大量の土砂が黄河から流れて、流域の土地が高くなり、江蘇北部の海岸線が外側に延びた。黄河南侵の初期、黄河は別に分かれて潁州、渦州、睢州、泗州から淮河に入った。1194年から1885年まで、黄河は淮河に流れ込んだ。この660年間に淮河の河口および付近の沿海地域の海岸線は50～70km延び、平均して十年で1km延びた。

黄河が江蘇北部から海に入って以後、それが運んできた泥砂によって、江蘇北部の海岸線が外に延びた。1855年に黄河が蘇北平原を離れて以後、蘇北平原は土砂がなくなったことにより、新しい発展段階に入った。もともと海中に向かっていた黄河の三角洲海岸線が、波と潮の流れに削られて絶えず後退してきた。その後退の平均速度は毎年150～200mで、この100年来で約20km後退した。

五. 杭州湾の歴史的変遷

杭州湾の変遷は、直接徽州の命運と関係がある。徽州と杭州湾とは一つの川でつながっている。それが銭塘江である。杭州湾の北岸は4世紀以前には外に張り出し、階段状になっていた。4世紀から15世紀には、海潮に削られて内に向かって崩れ、沙嘴南部海岸線の崩れは700kmに達した。一方、杭州湾の南岸は海潮が運ぶ泥沙によって、基本的には外側に張り出した状態で、増加した土地の面積は1260km²である。すると、杭州湾全部で増加した土地は560km²なので、年平均0.9km²の増加となる。

第4紀の大海侵の時、銭塘江の河口は今の富陽付近にあった。当時、杭州、蕭山一帯は海湾だった。杭州付近は内陸の瀉湖を形成し、完全に大海と分離してきた。これが今日の西湖である。隋唐の際、西湖は淡水化し、そのまま固定した。五代の呉越国と南宋王朝は前後して杭州を都とし（南宋時は臨安と称した）、西湖の様子は大きく変わった。元朝の

初め、イタリアの旅行家マルコ・ポーロは『東方見聞録』の中で、杭州は世界で最も美しい都市であると誉め讃えている。これより西湖は世界に名を馳せた。

钱塘江上中流域の泥沙は年ごとに下流へ流れる。同時に多くの近海海流も不時に泥沙を運び、杭州湾南岸の地勢平穏な河口や海岸付近に堆積し、次第に高い海涂を形成した。清の康熙53年（1714年）には、新たに成長した海涂が90万畝に達した。

六. 徽州本土の地理的変遷

徽州周辺の地理が大きな変遷を遂げたと同時に、徽州本土の地理的変遷も十分に顕在化した。ここには明確な特徴があり、これはすべて徽州の歴史文化や社会経済と関係がある。地質学者の解釈によれば、徽州の地殻変動はかなり活発である。8億年前、地質学上の「震旦紀」には、このあたりは海であった。1億年前の「侏儒紀」に、この地域は地表に上昇し、黄山もこの時に形成された。徽州には高い山々の地域が変成している。多くの山々がめぐり、四方がふさがり、わずかに水路が山から出ているだけだ。この気候と地理環境は、稲作に適している。これには一定の条件を必要とし、鉄の農具、開墾、耕耘、水路、疎水などがそれである。隋唐以前、南方では鉄の農具は十分には行きわたらず、徽州の社会経済は比較的遅れていた。徽州の社会経済が発展する出口は、規模の大きい農業を開発する点にかかっている。例えば茶や果物、林木、薬などの経済事業や、さらには工業や商業に着手することである。

歴代政権の変化は、行政区画の地理的変化をもたらした。徽州の行政区画は多くの変遷を経て、建置と分割を繰り返し、徽州社会発展の基本路線を示してきた。その変化は、4つの重要な段階に分かれる。第一に春秋時期は呉に属し、のちに越に属し、さらに楚に属した。秦代は鄣郡に属し、漢代は丹陽郡に属した。呉の孫権がここを開発し、新都郡を建てた。晋が呉を平定すると新安と改名し、南朝の宋、齊もこれによった。隋が陳を滅ぼすと歙州を置き、煬帝の初年に州が廃止されて新安郡を置いた。唐は歙州とし、あるいは新安郡とした。この後、北方では戦争が頻発し、人口が次第に南方へ流動した。六朝時代に、一部分の北方の人々が相継いで徽州に流寓し、徽州本土の人口増加に結合した。徽州社会の生産力も次第に増加し、郡や県も次第に増加した。その主要な特徴は北方からここに流寓した人々が土着の山越族の人々と融合し、共同で徽州を開発したことにある。

第二に隋王朝が統一をうち立て、南北大運河を開通し、南北の交流を進めた。淮河流域と江南地域はかなり深い経済開発を達成した。当時、「新安」または「歙」と呼ばれた徽州は、社会経済的にも次第に発展した。徽州は長足の進歩を遂げた。唐宋時期、国家統一が相対的に安定し、国家経済の重心が南方へ移動するという歴史現象が出現した。徽州もこの時期に大きく発展した。南宋の初期に羅願の編集した『新安志』には、徽州の社会経済的発展の一部が記されている。

第三に南宋王朝は浙江の臨安（今の杭州）に都を置いたが、ここは徽州に近い。徽州は衛星の重鎮に変化し、今までになかった発展の機会に恵まれた。徽州の歴史文化はこの歴史時期に繁栄し、光彩を放っている。中国思想および学術上で著名な歴史人物朱熹およびその学術はこの時期に徽州で誕生した。第四は明清時期、徽州の社会経済は手工業や商業が主要な要素に転じ、それが勃興して全国に雄と称され、中国資本主義萌芽の典型的な地域になった。徽州の社会経済と歴史文化が蓄積されたのは、主にこの歴史段階である。

七. 中国史上の「徽州歴史地理学」研究

徽学研究の資料として唐代の『元和郡県図志』、宋代の『太平広記』『輿地紀勝』『方

輿勝覽』『元豊九域志』がある。羅願『新安志』は系統的な徽州歴史地理のまとめとなっている。その特徴は第一に徽州地理の概貌を解明していること、第二に徽州の経済地理を提示していること、第三に徽州の人文地理を記述していることにある。明清時代の「地方志」は徽州歴史地理の深化したまとめとなっている。明清時期の徽州方志学の中では、地理学の成果が比較的大きい。それは次の三つの方面に体现されている。第一は客観的に徽州地理の様子を提示している点、第二は徽州の自然、経済、生態環境の貴重な資料を保存している点、第三は徽州の人文地理を客観的に記載している点である。

八. 「徽州歴史地理」研究の趨勢

これまでの「徽州歴史地理」研究には次のような欠点がある。まず、ある一つの問題について地理分布の変化の軌跡が反映できていない。次に、関連する経済事業、例えば手工業や商業などについて、開発と発展の地理分布が不明である。そして、徽州の自然資源の地理分布について記載が不正確である。よって、歴史上における徽州の開発の深度と水準が確定しにくく、歴史を手本として見る効用がない。徽州の歴史地理学は徽州の地理環境中の一種の物質的、精神的な歴史現象の地理分布を系統的に研究し、その地理分布の変化の軌跡と論理を追究し、徽学研究に基本的に重要な歴史資料と学術的総括を提供しなければならない。

2004年4月9日(金) 安徽大学鷺池にて

徽学研究在不断深化，从历史地理学的角度，总结徽州的历史地理，不仅对于徽学研究具有直接帮助，也扩大了徽学研究的领域。

徽州特殊的地理环境和徽州周边的地理环境变迁，深刻影响了徽州的社会历史和文化。尤其是宋代以后，明清时期徽州商帮的崛起，与徽州的地理环境和周边地理环境的变迁不无关系。徽州位于中国东南地区，中世纪中国东南地区的自然地理变迁十分活跃，直接影响徽州社会经济与社会历史发生重大变化。尤其是中国东部沿海地区海岸变迁、长江中下游鄱阳湖的及长江入海口的变迁、钱塘江入海口及杭州湾的变迁、黄河夺淮带来苏北海岸的变迁等等，无不成为明清徽商的活跃和徽州社会经济的发展提供了重要的背景。本文试对徽州历史地理及其周边历史地理变迁进行粗略探索，并总结前人对于徽州地理探索的成就，提出进一步加强徽州历史地理学研究的几点认识。

一、中国东南海岸的变迁及其对徽州的影响

徽州虽然不濒临大海，但是襟连中国东南沿海地区。沿海地区的地理环境变迁和海岸扩展延伸，带来内陆河流入海口的变迁，沿海港口的发育、沿海城市的兴起等，直接影响徽州手工业和商业的兴衰，刺激徽州社会历史的发展。

中国中世纪（三至十八世纪）东南海岸的变迁，极其剧烈。早在两、三万年前，东南海平面很低，比现在的海面低一百多米。当时中国的台湾岛、海南岛等都与大陆连接，中国的海岸线在台湾岛以东，在钓鱼列岛一带向朝鲜的济州岛一线伸延。大约一万年后至五、六千年前，冰川消融，海水上涨，中国陆地的海岸线后退达数百公里。中国沿海的台湾、海南岛等，被海水分割而成岛屿，东部平原上的大河下游三角洲也都不存在。¹但是，在近20个世纪，这里发生了很大变化。

1、东部海岸变迁的历史检讨

今天江苏北部沿海平原地带，其海岸在中世纪的变迁比较明显。依据历史记载及现存沉积物质的物理分析，先秦时期，苏北平原南端的长江古沙咀由扬州向东延伸，其海岸线位于今泰州到如皋、海安以东的李堡地区。李堡以北的海岸线，位于今东台、盐城、阜宁、涟水县东的云梯关、锦屏山东麓、连云港市一带。今如东县（掘港）当时还是孤悬于江口以北的海岛。²

检讨文献资料，这些地区不断建置郡县的记载，可以看到这里海岸外伸的轨迹。秦朝曾经设置朐县，位于今苏北沿海连云港市西南。两汉时期，设置盐渎县，位于今盐城县东北角；又设置海西县，位于今灌南县东南。东晋南北朝时，长江北岸沙嘴（廖角嘴）自今白蒲向东伸展，与海上的岛屿相连。今南通市当时称为“狼山海”，位于大海之中。南朝宋、齐时期，长江口北岸沙嘴继续东展，沿海陆地继续增长，苏北南兖州增设了海陵郡（治建陵县），下辖建陵（今东台县南）、海安、如皋、蒲涛（今如皋县东南白蒲镇）、临江（今如皋县南）、宁海（今如皋县西南）等县。

唐朝大历年间（766-779年），李承修建捍海堰，海上的东布洲已经与大陆相连。五代时期，长江北岸的廖角嘴，向东延伸到今吕四港附近。当时南唐政权针对海岸外涨，在海陵县（今泰州市）南部另外建置泰兴县（今县）；后周在江、海交汇的东南端设立海门县（今启东县北）和静海县（今南通市），并在静海县增置通州。北宋天圣二年（1024年），范仲淹主持修建捍海堰（即范公堤），南起启东县吕四镇，北至今阜宁县，长290公里。由上可知，在这一千八百多年有文字记载的历史时期内，苏北海岸向东有了大幅度的伸展。

¹ 参阅王育民《中国历史地理概论》。

² 参阅王育民《中国历史地理概论》

2、东部海岸变迁的地质考察

近年来,地理学者对苏北里下河地区泻湖微地貌的观察,也提出了这一带海岸东延的证据。在苏北自阜宁白沙起,沿范公堤两侧发现有多条高出地面0.5米至2米左右的断续的沙堤或贝壳堤。这是海岸留下的遗迹。沙堤的方向,与风向成直角关系。证明历史时期苏北海岸线很早即定位在宋代“范公堤”的位置。岸外沙堤的形成与东西向的长江北岸古沙嘴(廖角嘴)的伸展,两者最终连接起来形成了苏北里下河地区的泻湖地带。在岸外沙堤的后面,包括里下河洼地和运西湖群的一部分,都曾是泻湖的范围。处于泻湖中心的兴化县,在地面以下的海相地层中,发现有海滨泻湖条件下生存在咸淡水交汇的动物群——蛭(chēng,海产贝类,软体动物。)子,正是古泻湖地区的水通过沙堤或贝壳堤的缺口和海水沟通的证明。进而显示宋元以后,今苏北东南海岸逐渐向东延伸的轨迹,今天的上海市地带隆起,升出海面,发育成长江出海口的繁荣港口城市。

3、广陵涛的潮汐显示了东部海岸变迁

从秦汉到隋唐时期,长江入海口在今天镇江、扬州一带,再往东便是海湾。在长江流沙淤积和海潮顶托下,长江入海口的喇叭庄地形,潮汐作用特别显著。历史上长江口扬州附近,形成汹涌澎湃的涌潮,名之为“广陵涛”,因为秦王朝在这里建置广陵县治而得名。广陵县建置沿至两汉,“广陵观涛”成为两汉以来的盛事。晋郭璞:《江赋》云:“鼓洪涛于赤岸,沦余波于柴桑。”赤岸指位于扬州城西二十公里的赤岸湖,柴桑即今九江。可见晋时涌潮形成于江口的扬州,而潮区界顶则远及九江(今江西)。

唐宋时期,扬州能够成为中国著名的都市和海外交通贸易的基地,就是因为位于长江入海口的重要地理位置。扬州距海口既近,海船可以直达城下,故能成为对外贸易口岸。今天全国最为繁荣的对外贸易口岸上海,隋唐时期却是一片草莱。

长期流沙淤积和海潮顶托作用,海湾地区的陆地渐渐外涨,海岸时时在变化,不断向东推进。现在江苏连云港市,唐代建置为海州东海县。当时东海县县城所在地,位于田横岛,县城设在岛上。从东海县县城到州治(朐山县)所在地,需要越海而行,海道90里。唐代苏州下辖海盐县,也有类似现象。唐代泗州涟水县(今江苏涟水)东北距海104里。北宋时期,涟水县距海已改为140里,较唐代有了很大的差距。

海岸的变迁,带来了沿海社会生活和社会经济的变化。直接与海岸变迁有关的海港,是海外交通、贸易的基地和出发点。

4、唐代长江下游的地理变迁

隋唐时期,不仅今扬州市距海不远,长江口南北各地的海岸,也较今天为近。长江海湾北岸的沙嘴,由今江都向东北伸展到海安李堡附近,与岸外沙堤相合,形成里下河洼区;海湾南岸沙嘴,从江阴以下,沿着今常熟、太仓、嘉定、青浦一线,向东南入海,到达杭州湾,由于受到强潮作用和东南季风的影响,产生向西的泥沙流,沙嘴转而向西伸展,与正在发展中的钱塘江口北岸沙嘴相连接,把海湾封闭成泻湖,最后形成太湖平原,直接影响徽州的发展。唐代中期太湖流域的经济有了很大发展,苏州已是“珍货远物毕集于吴之中”,成为国内贸易的中心城市。白居易诗:“霅(zhá)川(湖州)殊冷僻,茂苑(苏州)太繁雄,惟有钱塘郡,闲忙正适中”,说明苏州作为浙西地区的商业都会。

5、宋代以后长江口南岸的变迁

长江口南岸沙嘴,从四世纪起,开始向东推进。自东吴征服山越和晋室东渡以后,大量山地得到开发,森林植被被采伐,水土流失,泥沙逐渐在河口沉积。两晋时期,海岸已伸展至太仓东北20公里。近年地质工作者在古冈身外侧约20公里发现一条与古冈身相平行的断续相连的沙带,并发现唐代的遗址。说明公元十世纪以前的唐代,今上海市区大部分已经成陆。宋代海岸又向东有了大幅度的增长。

北宋时，海盐至松江（吴淞江）有捍海塘，长75公里。南宋乾道八年（1172年），另建里护塘。近年在里护塘内侧高桥、惠南镇发现有南宋墓葬。根据里护塘的位置，说明从四世纪到十二世纪的八九百年间，海岸线从冈身东侧附近推向里护塘，达30多公里。历史时期长江口南岸沙嘴北缘外延，沙嘴前端的南汇嘴向东北移动，其直线距离为47公里，北缘增长总面积达3630平方公里。其中太仓、嘉定一带往东北至长江南岸的垂直距离最短，而伸展速度最慢，约每60至100年涨出一公里；往东南至南汇的距离最远，而伸展速度最快，约每20年涨一公里。平均而言，海岸增长面积为每年零点零二平方公里。

二、唐宋长江下游内陆的变迁

1、长江水道中沙洲的发育

唐代后期，扬州城下的海舶逐渐减少，但是扬州附近的州县海舶来往渐渐兴盛。这不是长江口外海岸有了新的变化，而是扬州和润州（治所在今江苏镇江）之间长江水道有了变化。这两个州城的距离约为七十里，江水北抵扬州城下，南至北固山麓。北固山位于润州城北。这里江面宽阔，南北往来船只畅行。但是由于江中有沙洲，其大者是瓜洲。瓜洲横峙江中，随着沙洲的淤积，瓜洲北侧的江汉渐渐淤塞成陆，水上交通运输受到阻碍，开元时润州刺史在瓜洲上开凿一条伊娄河，南北交通才显得便利。瓜洲北侧那条江汉淤塞成陆，显示扬州城外的长江向南摆动。原来海潮可以直通扬州郭内，可是到唐代宗大历年间，潮汛渐渐消失。海潮既已不再通到扬州郭内，海舶也就不再到扬州城下。但是，这一带动海舶数量仍然屈指可数。唐文宗太和三年（829）颁布的《疾愈德音》，要岭南、福建、扬州等地的节度使存问蕃客（外商），说明扬州一带的蕃客仍然兴盛。

2、明清时期鄱阳湖水域的扩大

徽州有祁门水（即是阊江）直下鄱阳湖。徽州取“祁门水入鄱，民以茗、漆、纸、木行江西，仰其米自给。”¹鄱阳湖，也是徽州西出江西，沟通长江中游的经济文化交流的要道。鄱阳湖的变迁，直接影响徽州的命运。鄱阳湖，古称彭蠡。《水经·赣水注》记载，贯通江西的赣水，沿途接纳10条支流，俱注于彭蠡。彭蠡湖东西40里，形成一片开阔的水域。隋王朝“炀帝时，以鄱阳山所接，兼有鄱阳之称”，即称之为鄱阳湖。鄱阳湖北面与长江相通。唐代，是我国历史上高温多雨时期，长江干支流的流量增大，长江水由鄱阳湖湖口倒灌入湖，由于赣江水的顶托，鄱阳湖水域扩展。唐末、五代以至北宋时期，鄱阳湖扩展到鄱阳县、都昌县境。元、明两代，湖区沉降，鄱阳湖逐渐向西南方扩展，延伸至进贤县。清初，鄱阳湖的发展到达水域最大的时期。

清朝后期，鄱阳湖水域面积居中国淡水湖第一位。鄱阳湖湖盆地势比长江略高，修、赣、抚、信、饶五水总汇鄱阳湖，通过鄱阳湖调蓄后，由湖口汇入长江。这样，长江、鄱阳湖、五河之水汇通，交通运输发达，为商旅贸易提供了优越多条件。

三、上海市的发育与兴盛

上海成陆较晚，八世纪初，海岸退至黄浦江东，长江入海口附近，一片荒地，未能形成港口可以代替扬州。但是，唐代以降，海岸渐渐东移，上海的港口地位初露端倪。

1、历史早期上海地区的演变

唐玄宗天宝十年（751年），上海地区开始建置华亭县。据《元和郡县志》载：“天宝十年，吴郡（苏州）太守赵居贞奏割昆山（南境）、嘉兴（东境）、海盐（北境）三县置”，华亭县设治于今松江县

¹罗愿《新安志》卷1《风俗》。

城,这是上海地区建立的第一个县城,后来一直存在并不断发展。唐时,海盐又由马嶧城移至今县治处。五代十国时期,吴越王钱镠在苏州建置“中吴军”,华亭县属中吴军。后唐同光二年(924年),嘉兴建置开元府,将华亭县划入开元府。后晋天福五年(940年),华亭县划入秀州,上海地区便成为吴越秀州的属地。

2、早期上海的港口——沪渎、青龙镇

东晋以后,随着长江流域的开发,长江口南岸沙嘴新淤涨的陆地冈身以东伸展。太湖入海的重要水道吴淞江的江口,作为江海要冲的地位也就显得重要起来。东晋成帝时(326-342年),虞潭为吴国内史,“修沪渎垒,以防海抄”安帝隆安四年(400年),吴国内史袁山松又“筑此城以备孙恩。”这就是后来形成海口城的沪渎港。南宋绍熙四年(1193年)成书的《云间志》云:“沪渎垒旧有东、西二城”。万历《上海县志》沪渎垒条又称:“在县北一十里,有东、西二城尽噬于江”。同治《上海县志》西芦浦条称:“即古芦子浦入口处,在今曹家渡南。”即由曹家渡引吴淞江水向南通肇家浜、龙华港。可以推断沪渎垒的东西二城当在今普陀区的光新路两侧,这里也就是东晋时的海岸线所在。

在修筑沪渎垒后,上海人民又开始兴筑海塘。据《新唐书·地理志》盐官(县)条下记载:“有捍海塘堤,长百二十四里,开元元年重筑”。近年来,地质工作者发现北起宝山县,南经川沙县,至南汇县的一条断续的地下砂带,正是上述开元海塘的遗迹,表明今上海市区唐时已大部分成陆。随着海岸线的推进,唐代横贯上海大陆北部的吴淞江入海口,在今江湾与北蔡之间逐渐形成了一个喇叭形海湾。嘉庆《松江府志》谓:“吴淞江,唐时阔二十里”,即指介于江海之间的沪渎港而言。

沪渎垒和海塘的修建,内陆土地逐渐垦殖,农业生产得到发展,沪渎港的西端兴起了青龙镇(今旧青浦)。青龙镇,距离华亭县北27公里,东距沪渎港海口不远,溯吴淞江西北可达苏州,西南可到嘉兴,地处水路交通要冲。据明《松江府志》记载:青龙镇“天宝五年(746年)置”,又据嘉庆《松江府志》载:唐代天宝年间(742-756年)、长庆元年(821年)先后建成报德和国庆院两寺。报德寺有七级宝塔,建于长庆年间。据《宝塔铭》说:建塔之前,沪渎港“与海相接,茫然无辨”,入港船只,“常因此失势,飘入深波”;塔成后,为入港船只起了航标的作用。寺院浮屠的建筑,正是中唐时期青龙镇海上贸易兴起的证明。

唐代中期太湖流域的经济有了很大发展,苏州已是“珍货远物毕集于吴之中”,成为国内贸易的中心城市。白居易诗:“霅(zhà)川(湖州)殊冷僻,茂苑(苏州)太繁雄,惟有钱塘郡,闲忙正适中”,说明苏州作为浙西地区的商业都会,其地位超过杭州。华亭也因有“鱼稻海盐之富”而商贾辐辏。青龙镇以其“瞰松江上,据沪渎之口”的有利地位,成为两地海上交通和转口贸易的活动中心。杜甫《昔游诗》有“吴门转粟帛,泛海陵蓬莱”之句,即反映了苏州一带的贡物经吴淞江、沪渎港转口北运的情况。唐代青龙镇已是江南沿海最早的海上交通与贸易港口之一。

宋代由于海舶辐辏,上海开始设镇,元代设县。明清时期,上海已经渐渐兴盛。徽州商人与时俱进,驻足新兴城市,上海成为徽州商人的集散地了。

四、黄河夺淮与苏北海岸的变迁

宋末元初,黄河夺淮,引起黄、淮、江下游水系的变迁。

1、黄河夺淮的路线

金章宗明昌五年(1194年),黄河在阳武决口,夺淮入海,大量泥沙随河水而下,沿途填高了淮河河槽、淮河两岸洼地、海岸外的海滩,苏北海岸线由此向外伸展。黄河南侵的初期,河水分别由颍、涡、睢、泗入淮。大量泥沙在沿途洼地淤积,河口外伸并不明显。

明朝弘治八年(1495年),黄河北股断流,黄河水全部注入淮河,淮河、海外泥沙迅速淤涨。万历六年(1578年),潘季驯治河,采用“束水攻沙”的方略,修建一条由汴入泗,由泗入淮的固定

河道（今地图上标志为淤黄河）。这一方略，减少了沿途泥沙的淤积，但是入海的河口三角洲迅速地发育出来。从万历元年（1573年）到清康熙元年（1662年）的89年间，黄淮合流的人海口，向东推移了25公里，即从今涟水、滨海两县交界的云梯关入海。万历六年（1578年），河口东移到云梯关以东四套附近，清康熙三十九年（1700年）下移30公里至八滩附近。¹ 乾隆四十一年（1776年），河口又下移20多公里至新淤尖附近。

²从1578到1776年的近二百年间，河口平均每年向海中推进200米至250米左右。

从公元1194年黄河夺淮起，到1855年铜瓦厢决口，黄河放弃入淮河止，这660年间，淮河入海口及其附近沿海地区的海岸线向海中伸展了50至70公里，平均每十年向海上延伸1公里左右。今连云港市海外的云台山，古名郁州，为《山海经》中的十洲之一，相传秦末田横居此，故又名田横岛。明末仍然位于海中。明万历二十一年（1593年）“开黄坝新河”引黄河入海³，海岸迅速外涨。清康熙四十年（1701年），“海涨沙淤，海口渐塞”，康熙五十年（1711年），“云台山便与大陆连成一片”⁴，在此建置了灌云县。

淮安、阜宁以南的苏北海岸，在黄河夺淮以前，一直比较稳定。唐大历中（766—779年）为防海浪而兴筑的捍海堰，与十一世纪北宋所筑的范公堤基本上都沿着海岸沙堤处于同一个位置上。⁵黄河夺淮以后，海岸向外淤涨的速度不一，时快时慢，有时甚至后退。以盐城县为例，南宋时海岸在县东1里的范公堤外侧，明宣德年间（1426—1435年），堤外新淤涨的陆地已达15公里，明末十七世纪初，海岸已经东移在城东25公里，十九世纪中叶，海岸在城东50公里，到二十世纪三十年代，已在城东70公里了。⁶

北宋范仲淹修筑的捍海堰，在海岸变迁中已经退居内陆，被人们改称为范公堤，一大段堤身已改筑成公路，成为苏北沿海地区交通运输的动脉。

2、苏北海岸的变迁

黄河由苏北入海以后，它所带来的泥沙，不仅促使了苏北海岸的外伸，并在苏北海滨形成许多暗沙，如大沙、长沙、北沙、瑶沙、蒲子沙、黄子沙、金家沙、庄家沙、郎家沙、勿南沙等，使海岸外边的海底地貌复杂化起来；同时，黄河的泥沙也因决口漫滩而大量沉积在泻湖地区，加高了里下河地区的地面，形成辽阔的沃土，适宜耕种。但它并未能彻底改变整个里下河地区古泻湖的地貌。至今射阳、兴化、溱潼一带还留下大片广阔的湖荡。⁷ 1855年黄河离开苏北平原以后，苏北海岸因失去泥沙来源而进入新的发展阶段。原来伸向海中的废黄河三角洲海岸，在海浪和涨潮流的冲刷下不断后退。废黄河口的平均后退速度为每年150至200米，一百多年来，海岸后退约20公里。⁸

¹ 《行水金鉴》卷五三，引张文瑞《治河书》。

² 《河渠纪闻》引萨载疏。

³ 武同举：《江苏水利全书》卷十。

⁴ 嘉庆《海州志》卷十一

⁵ 《新唐书》卷143《李承传》。

⁶ 民国二十五年《盐城县志》卷一。

⁷ 黎尚豪：《江苏兴化湖群的特征》，《中国海洋湖沼学会1963年学术年会论文摘要汇编》，科学出版社，1963年。

⁸ 华东师范大学河口研究室：《海州湾岸滩的演变过程和泥沙流方向》，1973年。

五、杭州湾的历史变迁

杭州湾北岸,就是长江三角洲的南缘,它与长江三角洲的形成过程有着密切的关系。远古时期,杭州湾口和长江三角洲乃是一片浅海。由于长江三角洲南沙嘴的发育发展和钱塘江北沙嘴的成长,逐渐连接封闭而成太湖地区的古泻湖,进而形成了钱塘江北岸的杭嘉湖平原。钱塘江南岸,则由于海潮带来长江入海的淤泥和浙东山岭冲刷下来的泥沙,淤积成宁绍地区的姚江平原,许多海中岩岛联成陆地,杭州湾逐渐成为喇叭状的河口。这一变迁,直接与徽州的命运相联系。

1、徽州与杭州湾当联系

徽州与杭州湾一水相牵。这就是钱塘江。钱塘江,中国浙江省最大河流,旧称浙江。有两源:正源发源于安徽省休宁县西南,流入浙江省建德市梅城,与来自西南的兰江相汇,向东北流入杭州湾,全长605千米。流域面积4.88万平方公里。钱塘江从源头至入海河口,各段分别有不同名称。

源头名冯村河;自鹤城至流口称大源河;流口至屯溪名率水;屯溪至浦口称青溪;浦口至梅城称新安江;淳安以上又称徽江,亦称歙港;梅城至桐庐称桐江;桐庐至萧山闻家堰称富春江;闻家堰至杭州闸口段,称之为江,河道曲折,形如倒写的“之”字;

闸口以下流经钱塘县(今杭州)的一段始名钱塘江。今天用最后一段名称泛指整条河流。钱塘江南源开化江,发源于安徽省休宁县的青芝埭尖,其上、中、下游各段名称分别称常山江、衢江、兰江,北流至梅城汇入主流。钱塘江水系发达,较大的支流除兰江以外,还有乌溪江、金华江(婺江)、壶源溪、浦阳江和曹娥江等。干支流的中、上游,大多穿行在地面起伏较大的山地、丘陵之中,河床比降大,险滩、跌水多,属山区性河流。梅城以下至芦茨埠,是著名的七里泷峡谷。出七里泷后,河面开阔,水流缓慢,水量大增,多年平均径流量431.4亿立方米,径流的多年变化较小。水力资源丰富。今天梅城以下,百吨级船只终年可在杭州到兰溪之间的江道上行驶。

2、杭州湾的变迁

杭州湾北岸的南汇嘴南缘,东汉在此建置海盐县,东晋曾经在境内王盘山屯兵。唐宋时期,柘林、奉贤一带的海岸,向东推到奉城、大团之间。而杭州湾北岸却处于内坍之下,王盘山以北、海盐东南、以及五里的望月亭等均相继沦于海。据估计,乍浦以南地区,从武则天久视元年(700年)到北宋建隆元年(960年)的260年间,有19公里宽的土地被海潮蚀掉。宋末元初,海塘的兴建,遏制内坍。元代海盐城外的宁海镇“陷于海”,明代海岸退到离海盐城仅半里许。清乾隆四十八年(1783年),在海宁老盐仓修建高达六、七米的鱼鳞石塘,杭州湾北部的岸线逐渐稳定下来。

杭州湾南岸部分处于先涨、后坍、再涨的循环之中。南宋前期(十二世纪),姚江平原向外涨到大古塘外面8公里,十三世纪南岸又发生内坍,十四世纪便坍到临山、浒山(慈溪)、观海卫一线。纵深达八公里,仍回到大古塘所在地。之后南岸转入外涨。从明代开始,近六百年来,外涨最宽地段纵深为15公里。平均每年外涨60米。十九世纪,大体上恢复到十二世纪的海岸线位置,但在庵东以西较偏南,以东则较偏北。

总的说,杭州湾北岸在四世纪以前处于向外淤涨阶段,四世纪到十五世纪,在海潮的冲刷下一直向内坍塌,沙嘴南部岸线内坍的土地达7百平方公里;杭州湾南岸,由于海潮搬运泥沙的作用,基本上处于外涨的状态,计增加土地面积1,260平方公里,全部杭州湾净增土地面积为560平方公里,即平均每年约增长零点九平方公里。

3、钱塘江河口以及杭州湾的变迁

第四纪大海浸的时候,钱塘江的出海口在今天的富阳附近,当时杭州、萧山一带还是海湾。杭州附近的半山、超山、丘山等都是被海水包围着的孤岛。天目山脉蜿蜒至海边的尾间,出现吴山、宝石山两个半岛,两个半岛环抱着浅海湾,湾口北部的浅海面对长江口,海流将长江河口的泥沙搬运过来,借助于钱塘江河口的涌潮,在湾口堆积,汉代以后,湾口沙嘴合拢封闭,形成内陆泻湖,完

全和大海分隔开来，即是今天的西湖。隋唐之际，湖水淡化，湖泊固定下来。五代时期的吴越国和南宋王朝先后建都杭州（南宋时称临安），西湖面貌的改变尤为迅速。元朝初年，意大利旅行家马可·波罗在《游记》中赞誉杭州为世界上最美丽华贵之城，从此西湖驰名世界。

4、杭州湾南岸的海涂

钱塘江上中游泥沙逐年下泄。同时更多的近岸海流也不时挟带泥沙，在沿海潮汐的顶托下，沉积于杭州湾南侧地势平缓的河口及海岸附近，并逐步淤高形成海涂。当海涂淤到适宜的高度时，人们便在其外围修筑围堤挡住海水，在堤内进行围垦。目前钱塘江和杭州湾南岸的萧绍、姚北两大平原就是这样在自然演变和海涂发展、海涂围垦的过程中形成的。

清康熙五十三年（1714年）时钱塘江南岸的古堤线，系自现在的钱塘江大桥南端附近起，穿过西兴镇，经长山，过航坞山，直达绍兴县以东曹娥江口的三江闸附近。以后，由于海涂淤涨，堤线逐步北移。现在的新堤线与上述古堤线之间的距离，最远处已达二十余公里，新老堤线之间的南沙地区，新生长的土地达90余万亩。

六、徽州本土地理的变迁

徽州周边的地理发生剧烈变迁到同时，徽州本土地理变迁也十分明显，并具有鲜明的特点，一切徽州的历史文化、社会经济无不与之相关。

1、徽州自然地理的变迁

按照地质学家的解释，徽州地壳运动十分活跃。8亿年前，地质学上称为“震旦纪”，这里曾经是沧海。到了1亿年前，地质学上称为“侏儒纪”，这里地表不断上升，发生沧桑之变，今天海拔3600多米的黄山在这里形成。¹徽州地理，从此与崇山峻岭相联系。其特点可以概括为“山多”“四塞”，“万山环绕，交通不便”，对外交通困难。尤其是古代，出山的交通很不方便，仅有几条水路，尚且需要经历山间很多深潭和浅滩，正如当地民谣所说：“深潭与浅滩，万转出新安（即是徽州）”。

这里的气候与地理环境，决定农业以开垦山地，种植水稻为主。种植水稻，不同于北方的粟麦，需要一定的水利条件，需求先进的铁农具，例如开垦、耕耘、挖沟疏渠等等。隋唐以前，我国南方的铁农具尚不能够广泛应用于农业生产，这就是隋唐以前，徽州的社会经济比较滞后的原因。另外，由于缺少铁农具，山田山地的开垦是有限的，制约了这里的农业发展。出现了山多田少，“七山一水一分田，一分道路加田园”的社会局面。徽州社会经济发展的出路，只有依靠开发大农业，如茶、果、林、木、药等等经济事业，进而手工业、商业等等。

2、徽州行政区划的变迁

历代政局的变化，带来了行政区划地理的变化。徽州行政区划历经演变，行政区划不断建置与析分，显示了徽州社会发展的基本线索。其变化有4个重要阶段。

（1）隋唐以前的徽州

在唐代人的眼中，两汉之前没有独立的州郡，只有建置了“歙”“黟”二县。杜佑《通典》卷128中描述说：“歙州（即是徽州）春秋时属吴，後属越，後又属楚。秦属郢郡。二汉属丹阳郡。”直至孙权开发东南地区，才在这里建置独立的行政区划，“孙权分丹阳立新都郡。晋平吴，改曰新安，宋齐并因之。隋平陈，置歙州；炀帝初州废，置新安郡。大唐为歙州，或为新安郡。”

这一变迁显示了徽州自六朝逐步开发的历史线索。六朝时期，徽州的本土居民主要是山越，孙权

¹参阅吴昭谦《黄山探奇》

集团的政治势力范围扩大到这里。孙吴集团为了加强自己的军事实力,竭力开发徽州。此后,北方战争频仍,人口逐渐向南方流动。六朝时期,一部分北方人口相继流寓徽州,结合徽州本土人口的繁衍,徽州的社会生产力逐渐增长,郡县也逐渐增添建置。其主要特点是北方流寓这里的人口,融合土著山越族人民,共同开发徽州。

(2) 唐宋经济重心南移时期的徽州

隋王朝建立了统一的局面,开通了南北大运河,沟通了南北交流,淮河流域和江南地区得到了较深的经济开发,当时,称为“新安”或“歙”的徽州,社会经济也逐渐崛起。赋税租调从徽州大山中输出。隋末,农民领袖汪华领导本地农民起义,参与推翻隋炀帝政权。汪华归附唐王朝以后,精心在这里经略,徽州获得了长足的进步。

唐宋时期,国家统一局面的相对稳定,国家经济重心出现了南移的历史现象。淮河流域、长江流域和南方地区得到了较大的开发,徽州在这一历史时期也得到了较大的发展。这在南宋初期,罗愿编修的《新安志》,已经客观地反映了徽州的社会经济发兴盛的一部分。徽州的社会经济和社会发展,已经远远超过了隋唐以前的历史,各种社会经济,包括农业、手工业、商业、文化、教育、法制等等,都跻身先进地区。

(3) 南宋政治中心南移时期的徽州

南宋王朝,由于特殊的历史原因,国家政治中心转移到浙江临安(今杭州),与徽州颈连。自古与浙江一水贯通的徽州,突然变迁为国家都城的卫星重镇,获得前所未有的发展机遇。徽州的学术文化正是这一历史时期繁荣兴盛,并且绽放光彩,中国思想学术史上著名的历史人物朱熹及其学术成就在这一时期诞生于徽州。

(4) 明清时期的徽州

明清时期,全国的政治中心迁移北京,但是东南地区的社会经济在持续兴盛发展,徽州社会经济转向以手工业、商业为主要成份,突兀崛起,称雄于全国,成为中国资本主义萌芽的典型区域。徽州的社会经济与历史文化积累,主要是这一历史阶段。

七、中国历史上“徽州地理学”的研究

1、唐宋地志初步总结的“徽州历史地理”

唐代的《元和郡县图志》、两宋的《太平广记》《輿地纪胜》《方輿胜览》《元丰九域志》等等地志文献中,已经有相关的卷帙记述了徽州的地理,总结了徽州的地理特征和人文、经济的地理分布,在一定意义上揭示了徽州的历史文化,取得了一定的成绩,赢得后人的肯定。

2、罗愿《新安志》系统总结“徽州历史地理”

(1) 阐明徽州地理的概貌

《新安志》记载了南宋时期的徽州的地理,下辖六县。分别是:歙、休宁、祁门、婺源、绩溪、黟县。其地理范围包括了今天的黄山市、黟、歙、祁门、休宁、绩溪、婺源等六县一市。《新安志》凡10卷。每一卷都有细目:

卷一《州郡》,内有“沿革”“风俗”“封建”“境土”“治所”“城社”“道路”“户口”“姓氏”“坊市”“官府”“庙学”“贡院”“放生池”“馆驿”“仓库”“刑警”“营寨”“邮传、祠庙”等目;

卷二《物产》，内有“谷粟”“蔬茹”“药物”“水果”“水族”“羽族”“兽类”“贡赋”等目；在“贡赋”目下又有“税则”“杂钱”“夏税物帛、小麦”“秋税糙米、折帛钱”“进贡”“贡物帛”“上贡纸”“酒课”“茶课”“盐课”“公用”等目；

卷三《歙县》，内有“沿革”“县境”“乡里”“户口”“田亩”“租税”“酒税”“官廨”“镇寨”“道路”“丘墓”“碑碣”“贤宰”等目；

卷四《休宁、祁门》；卷五《婺源、绩溪、黟县》；卷六、卷七《先达》，分别撰写了23名、17名人物小传。卷八《进士题名、义民、仙释》；卷九《牧守》；卷十《杂录》，内有“人事”“诗话”“杂艺”“砚”“纸”“墨”“定数”“神异”“记闻”等目。

自卷六至卷十，每卷前面都有小序。从全书的结构安排可以看出，《新安志》在编纂方面，反映了汉唐以来地理学内容的变化。其中最大的变化即是在地理学中增加了人文和经济方面的内容，注意从人文的角度和经济的角度来总结地域之内的重大事项，形成了人文地理学和经济地理学的重要特色。宋代这一变化最早始于乐史撰写的《太平寰宇记》。¹罗愿《新安志》的体例正是吸收了《太平寰宇记》的学术风格，在经济和人文方面设置了很多细目（见上文），对地方经济文化进行多层次、多角度的总结和记述。在揭示地方经济、文化特征和历史规律方面获得了一定的成就。其中地理学方面成就很多，经济地理学和人文地理学方面的价值尤为突出。

（2）揭示了徽州的经济地理

罗愿《新安志》10卷，在经济方面的地理总结所占的分量很重，几乎每一卷都有很多的细目。简略地统计一下，计有30余目：“户口”“坊市”“道路”“仓库”“邮传”“谷粟”“蔬茹”“药物”“水果”“水族”“羽族”“兽类”“税则”“杂钱”“夏税”“秋税”“折帛钱”“进贡”“贡物帛”“上贡纸”“酒课”“茶课”“盐课”“公用”“田亩”“租税”“酒税”“杂艺”“砚”“纸”“墨”等。其中有些细目中，包含了系列性的经济内容，如物产卷，任何一个细目，都对一类物产做出了系列性的著录，显示了徽州地方物产的鲜明特色。

检讨《新安志》中物产类的著录，约六千字。不仅载录了徽州物产的种类和名称，而且用释名的方法，记录了每一中物产的性状、用途和来历。如卷二“谷粟”目记载：“占禾本，出于占城国，其种宜旱。大中祥符五年诏，遣使福建取三万斛，并出种法”，推行于江淮浙之间，此种“亦曰旱稻粳。”在卷二“蔬茹”目中记载：“蒜之大者曰胡蒜，自西域来者也。蓼莽气羣，如小蒜而长，《本草》以为乳妇（喂奶的妇女）食之良。”在“货贿”目中记载：“山民夜刺漆插竹筧（jian 音，引流的竹管）其中，凌晓涓滴取之，用匕刮筒中，磔磔（zhe 音）有声，其勤至矣！岁旱则益之，天时雨，汁则不佳。”这种记载地方物产的方法，不仅深刻地揭示了徽州的经济面貌，为地方上的经济开发提供借鉴，而且丰富了中国物产地理学的内容，增加了该志书的学术价值。

（3）记述了徽州的人文地理

罗愿《新安志》在人文方面的总结和记述手法是，在纲目上列出了很多细目，划分了地方上的各类文化事项，在细目上就显示了人文特点。卷六介绍“先达”二十三人，卷七介绍“先达”十七人；卷八中设立“进士题名”“义民”“仙释”等目。通过以上细目，把当地有功名的、有学术的、有影响的文化人物和宗教人物记述出来；在卷九中专门介绍当地历代通判、郡守、州牧；在卷十中，设立了“人事”“诗话”“杂艺”“神异”“记闻”“定数”等目，介绍当地各类风俗人情，比较

¹参阅林衍经著《方志学求是集》P.79.广西人民出版社1989年版。

细致地记述了地方上的各类文化活动、概貌、特征,从而,更深刻地揭示了徽州的历史规律。罗愿记述当地的人文风俗,很重视选材,注意选取那些有代表性的事项,叙述力求准确简洁地揭示地方特色。例如“其山挺拔廉厉,水悍洁;其人多为御使谏官者;山限壤隔,民不染他俗,勤于山伐,能寒暑,恶衣食,女子正洁不佚淫,虽饥岁不鬻妻子;山谷民衣冠至百年不变。”在这一简洁的记述中,对徽州的山水特征进行了概括,对徽州山民的性格、素质、特点进行了客观地记述,同时,对徽州自然山水和民风民俗之间迁染的关系,做出了客观的揭示。既显示了当地的民风民俗概况,进而揭示了民风民俗与地方经济政治之间的关系。为地方官吏在风化教育方面提供了重要的借鉴。

在《新安志》的人文地理中还能透视出地方政治和公益事业的历史记载。例如,卷三《山阜》目中记载黄山祥符寺的历史,祥符寺起缘于唐代。唐文宗大和五年、六年,刺史李敬方“风疾比岁”,两次到黄山入温泉浴“而疾瘳(chou, 抽音)”,於是“作龙堂”,“命僧主之”。这一记载虽然夹杂有迷信糟粕,客观上透露了黄山温泉浴在医疗卫生方面的意义和价值。李敬方在温泉浴建造“龙堂”,供人温泉浴,客观上开发了黄山温泉浴这一公益事业。这一点十分有意义。又例如卷八“义民”目中,记述了叶氏女为叔父冤案诉讼的故事。叶氏女“叔父为衙前吏,坐逋官钱五十万,系狱。”叶氏女认为是诬告,“以香置顶自灼,从昏达旦。中夜,狱官梦帝使命审其狱,果前县吏所负。”这一诉讼虽然蒙着神鬼的外衣,其结果是冤案被澄清。剥开迷信的外衣,客观上反映了徽州诉讼的一个社会侧影,叶氏女的法律意识也反映了宋代徽州社会上法律意识的程度。无论作者自觉或不自觉,这一记述都为徽州民风民俗的总结增添了社会意义和历史价值。

3、明清“地志”对于“徽州历史地理”的深化总结

明清时期的徽州方志学中,地理学成就较大。体现在三个方面:

(1) 客观地揭示了徽州的地理面貌

从我们所收集到的明清徽州方志(粗略统计71种)来看,徽州方志在揭示徽州地理面貌方面有三点比较突出:其一、全面记载了徽州的行政区划,包含州、县,以及县级以下的乡、里所在地的地理范围;同时比较准确地记载了徽州各级行政建置的历史沿革。随着徽州修志业的不断发展,越往后,各级行政区划的记载越具体、详细。其二、在自然地理方面的记载也十分细致、丰富、准确。诸如徽州的地形、地貌、山川、水陆交通路线等,都有明确的记载。其中有很多记载,或补充了正史地理志的空白,或矫正了地理志和“一统志”的错误,或丰富了地理志、一统志的内容。其三、地图学方面显示了很大的进步。几乎每一部方志都有地图,有总图,也有局部地图。这些地图的绘制和制版,都凝聚了自西晋裴秀总结“制图六体”以来的地图理论学说,显示了分率(即比例)、准望(方位)、道里(距离)、高下、方邪(角度)、迂直等制图的表现方法和科学的制图原则。

(2) 保存了徽州自然、经济、生态环境的宝贵资料

按照中国大百科全书关于学科的分类,自然地理、经济地理包含的内容很多,物产、农业、科技、灾害等内容都含盖在内。明清时期的徽州地方志,关于上述内容十分丰富。每一种物产的名称、性质和分布等情况都有详细记载。在“祥异”和“灾异”栏目中,记载了自然灾害方面的资料,为徽州防灾、治灾提供了重要的历史借鉴。此外,徽州方志记载了各种自然资源的情况,对于徽州开发,提供了历史借鉴。上述这些记载不仅丰富了方志的内容,提高了方志的学术价值和历史价值,而且拓宽了地学领域,呈现了徽州地学的新面貌。

(3) 客观地记载了徽州的人文地理

地方人文,如风俗、宗族、信仰、地方名胜、历史建筑、天文等等,这些反映地区历史文化特征

的内容,属于人文地理的范畴。自宋代罗愿《新安志》创“徽州人文地理”,徽州方志一直保持这一特征。明清徽州各类方志中关于这方面的内容有丰富的记载,包括徽州的著名历史人物及其著述和文集都有记载。例如道光《徽州府志》中的《艺文志》就收录徽人著作3900多种。这不仅从一个侧面反映了徽州地区历史文化的兴盛程度,也从宏观上看到全国区域文化的发展与演变。

八、“徽州历史地理”研究的趋势

徽州的地理研究,是揭示徽州历史文化不可或缺一方面。迄今为止,关于徽州的历史地理的研究,尚没有专著,部分相关的著作中涉及到徽州地理学一部分内容,远远不能够满足学术研究的要求。如何建设新的徽州地理学,以适应徽学发展的需要,必须认真总结前人的研究成果,也必需总结分析历史上地理学研究的条件不足及其学术上的局限性,从而探求徽州历史地理学的新思路和新的发展方向,以便适应新形势下徽学学术发展。

1、历史上“徽州地理”研究的缺陷

前人关于徽州历史地理的研究,为我们留下了宝贵的文化遗产。但是必需指出,传统的历史地理学还有许多缺陷。尤其受到地理学学术条件的局限,其缺陷也明显曝露出来。第一,不能够动态地反映某一问题地理分布的变化轨迹。例如徽州城镇的发育与发展,徽州村落的发育与发展,徽州学校、寺庙的兴建、宗庙祠堂及其地理分布在每一时期的变化,这些都缺少分析研究,从而看不到徽州社会历史深层的变化。第二、有关经济方面的事业如手工业、商业等等,其开发和发展的地理分布,皆记载不详;农业方面的各种水利、农田垦殖与荒废等等,在前人的地理文献中也都语焉不详。这对于认识徽州社会经济和社会发展是有影响的。第三、对于徽州的自然资源的地理分布记载不确切,因而对于历史上徽州开发的深度和历史水平难以准确定论与总结,因而极大程度局限了历史总结的借鉴功能。

2、“徽州历史地理”研究前瞻

按照现代学科的分类,徽州历史地理,包含有徽州人文地理学、徽州自然地理学。(参阅《中国大百科全书》关于地理学科分类。)内容包含研究徽州地区各种社会经济活动的空间结构和变化,以及与地理环境的关系。其中,徽州人文地理,可以分为徽州社会文化地理学、经济地理学、政治地理学、城市地理学等方面。在徽州社会文化地理中,包括人种地理、人口地理、聚落地理、社会地理、文化地理等。在徽州经济地理中,包括农业地理、工业、手工业地理、商业地理、交通运输地理,以及新近形成的旅游地理等等。徽州政治地理学包括狭义的政治地理、行政区划地理和军事地理。有关城镇地理,在学界有时候被视为聚落地理的一部分,隶属社会文化地理学,经过最近20年的发展,它的研究对象和内容远远超出了聚落和社会文化的范围,已成为人文地理学的一个独立分支。徽州的行政区划变迁,徽州的人口分布与变迁,徽州文化名人的分布与变迁,其中包含宗族的分布与变迁,学校教育的分布与变迁,文化设施的分布与变迁,如书肆、刻书业的分布与变迁,等等,应该进行考查和统计,力求获得相对准确的结论。

徽州的社会经济变迁,其中包含徽州的社会经济环境变迁,主要农业区的变迁,蚕桑和丝绸纺织业的分布与变迁,植棉与棉织业的分布与变迁,畜牧业的分布与变迁,城邑和城镇的分布与变迁,交通路线的历史变迁,境外交通的发展与变迁,徽州商业的轨迹与变迁,等等,从历史地理学的角度,必须理清基本线索,有利于深层次丰富徽学研究的内容。从历史地理学的视觉来看徽州的历史文化现象,寻求其每一个历史阶段徽州各种事物变迁的轨迹及其根源,都会求得合理的认识。例如,有一些相互对立又相互统一问题:为什么封建宗法文化深厚的徽州地区,却较早出现了资本主义萌芽?为什么这里交通闭塞却又教育先进?并且各种学术活动十分活跃?新安理学、新安医学、新安艺术如绘画、雕塑、建筑等等,都在全国享有很高的声誉,甚至独树一帜,这是为什么?为什么

隋唐以后徽州才渐渐得到开发? 等等, 这些问题都可以此历史地理学获得较为合理的认识与总结

概略言之, 徽州历史地理, 应该全面系统地研究徽州地理环境中的每一种物质的精神的历史现象的地理分布, 研究其地理分布的变化轨迹及其规律, 为徽学研究提供基本面的重要历史资料和学术总结。

2004年4月9日星期五于安徽大学鹅池

平成16年 (2004) 11月30日受理

平成16年 (2004) 12月31日発行